日本植物病理学会ニュース　第97号

（2022年2月）

【学会活動状況】

1. 部会開催報告

（1）東北部会開催報告

令和3年度日本植物病理学会東北部会は，仙台市内での対面開催をめざしていたが，新型コロナウイルス感染拡大防止のため，10月12～15日の4日間，オンラインでの開催となった．ダイナコム社のシステムを利用したオンデマンド動画配信の形式で行われ，一般42名，学生36名の計78名の参加があった．講演発表は菌類病12題，ウイルス・ウイロイド病6題，植物保護4題，細菌病2題の合計24題で，各講演発表に関する質疑・意見交換は掲示板で行われた．幹事会は部会開催前の10月7日にオンラインで開催され，次年度部会長には秋田県立大学生物資源科学部の藤晋一氏が選出された．また，本年度の日本植物病理学会東北部会地域貢献賞は，元秋田県農林水産技術センター果樹試験場長の深谷雅子氏［研究課題名：寒冷地における落葉果樹病害の生態解明と防除に関する研究］に決定し，11月11日に秋田県立大学で授賞式が行われた．令和4年度は福島県での開催が予定されている．（中村茂雄）

（2）九州部会開催報告

令和3年度日本植物病理学会九州部会は，新型コロナウイルス禍のため，昨年度と同様に（株）ダイナコム社のプラットホームを利用したWEB開催となった．11月24日～26日の開催期間中に地域貢献賞受賞講演，および一般講演をオンデマンド形式の動画配信とした．参加登録者数は65名，発表数26題と盛会であった．その内訳は当学会員41名，非会員6名，そして学生会員18名であった．今回，学生参加費を無料にしたことで，学生の参加数増加への一定の効果が認められた．総会はファイル転送システムによる資料配付とメール会議という形での開催となったが，特に問題は生じず，全ての議案が承認された．令和3年度日本植物病理学会九州部会地域貢献賞は吉松英明氏が「麦類および園芸作物における新病害の同定と防除技術に関する研究」という業績で受賞された．なお，令和4年度の次期開催地は長崎県で開催されることが決定した．地域貢献賞受賞講演では令和元年度受賞者である山口純一郎氏に「薬剤耐性菌対策を中心とした作物，野菜病害防除における地域貢献」という演題で地元佐賀県を中心とした植物病害防除に関する長年にわたる顕著な業績をオンデマンド配信頂いた．一般講演では座長を交えてチャット形式による質疑応答を行った．総閲覧数は1205回で，1題当たりの最高閲覧数は86回であった．質疑応答では演者からの回答へのさらなる応答も見受けられ，対面と変わらぬ活発な意見交換が実施できた．さらに九州部会幹事諸氏による厳正な審査のもと，13題の学生発表の中から2題を学生優秀発表賞に選出した．学生優秀発表賞は，琉球大学農学部植物病理学研究室の呑田佐知さんが「ゲットウプロアントシアニジンの植物ウイルスに対する直接的感染阻害効果」，佐賀大学農学部植物病制御学研究室の古嶋隼弥さんが「FISH法によるタマネギ乾腐病菌およびタマネギベと病菌の植物組織からの検出」という演題で受賞された．

今回の部会では，対面もしくはWEB開催の両方について，当初同時進行で準備を開始したが，最終的にWEB開催となった．例年の情報交換会は残念ながら今年も取り止めとなったが，次年度はコロナ禍が収まり，参加者が集まって懇親を深められることを期待したい．井上九州部会庶務幹事をはじめとする関係各位のご尽力ならびにご協力によって，成功裏に本部会を実施できた．ここに記して，心より御礼申し上げたい．（竹下　稔）

2. 研究会開催報告

（1）第20回植物病原菌類談話会

第20回植物病原菌類談話会は，オンライン開催にて令和3年12月11日（土）14:00～16:40にかけて開催し，翌週12月17日（金）13:00～12月20日（月）13:00までを「見逃し配信」として同様の内容を参加登録者を対象に視聴できるようにした．大学，公立の試験研究機関，独立行政法

人，種苗会社及び農業団体などから，学生・研究者 142 名の参加があった．

今回の談話会は，新たに幹事に加わった日恵野綾香氏（東海国立大学機構岐阜大学流域圏科学研究センター）による「疫病菌の分類　－こんなデータベースが欲しかった！」の講演ののち，静岡県農林環境専門職大学外側正之氏をコーディネーターとした「あれから 10 年余，あの菌は今！－ 二重命名法廃止のその後を語り合いましょう －」をテーマに，幹事が話題提供・現況報告を行った．まず初めに「命名規約の知識をアップデート」として，中島千晴氏（三重大学大学院生物資源学研究科）が「命名法上の問題」と「分類学上の問題」について整理し，最適な学名を探す手段について説明した．続いて，森川千春氏（石川県農林総合研究センター営農相談室）・外側正之氏が「公設試験場の現況　－ 昔の名前で出ています －」として，公益試験場からのアンケート結果をもとに二重命名法が廃止されても現状として困らないこと，困ることの具体例を挙げて説明した．また，青木孝之氏（農研機構遺伝資源研究センター）により「微生物ジーンバンクでの学名表記への対応」として，現在の農研機構遺伝資源研究センタージーンバンクの二重命名法への対応だけでなく，植物病原微生物の分類・同定支援システムを紹介した．最後に廣岡裕吏（法政大学）・佐藤豊三（新潟食料農業大学）が「変わり続ける学名の変わらないシーケンス　－ サツマイモ基腐病を例に －」として，2 つの学名を有していいたサツマイモ基腐病菌の整理の過程を丁寧に解説した．その後，日恵野氏も交えて講演者全員で自由討議が行われた．

本植物病原菌類談話会は，昨年度開催できないままに今年度も当初予定していた植物病理学会開催時期に，コロナウイルスの影響を受けて開催できなかった．しかし，できる方法で開催することとして，短い準備期間で幹事が話題を準備して開催するに至った．また，この期間にアンケートにお答えいただいた公設試験場の諸氏には感謝申し上げます．

今回はオンライン開催のメリットを活かし，例年と同等以上の参加者数となった．その反面，参加者からの質問がなく，質問しやすい環境を整える必要があるという課題が顕在化した．来年度もオンラインによる本談話会の開催を予定しています．（渡辺京子）

(2) 第 55 植物感染生理談話会

令和 3 年度の植物感染生理談話会は，コロナ禍の影響を受け，9 月 1 日から 3 日まで Zoom による web 開催となりました．開催地事務局がある宮崎市での開催を取りやめ，web 開催としたため何名の方にご参加頂けるか，運営側にとって想定が難しい状況でした．結果的には予測をはるかに上回る約 160 名の参加者となり，私ども運営事務局も安堵したところです．運営事務局には南九州大学の菅野先生と佐賀大学の草場先生に実行委員として入って頂き，会計業務と学生発表の円滑な遂行に多大なるお力添えを賜りました．両先生方にはこの場をお借りして厚くお礼申し上げます．

今回はテーマを植物病害研究のフロントライン―病原体との熱き闘い―」に設定し，13 名の方にご講演頂きました．1 日目は，病害発生・防除のフロントラインに位置する九州にゆかりのある演者に細菌の糖鎖分解酵素群，モデル生物カイコの植物病理学分野での利用，カンキツグリーニング病原細菌の生存戦略，ウイルス，媒介昆虫および植物との相互作用，そしてタマネギベと病との闘いに関する話題を提供頂き，熱き議論が展開されました．

2 日目は，植物免疫を調節する病原体サプレッサーと内生サプレッサー，植物と病原菌の相互作用におけるファイトアレキシンの役割，そして青枯病菌のクオラムセンシングシグナル伝達機構についてご講演頂き，活発な質疑応答がなされました．午後の特別講演では植物免疫研究の世界的トップランナーである津田賢一先生を海外から web を介してお招きし「Plant interactions with pathogenic and commensal bacteria」についてご講演頂き活発な討論が繰り広げられました．続いて，植物の発熱のしくみに関する第一人者である宮崎大学の稲葉靖子先生から「発熱性を持つソテツの再発見と発熱植物研究の新展開」と題してご講演頂き，植物生理学分野での最新知見をご紹介頂きました．3 日目は九州と北海道にゆかりのある演者にいもち病菌の病原性変異機構，病原ウイルス探索，ニンニクウイルスの駆逐作戦に関してご講演頂き，熱き討論を展開頂きました．

毎回行われているポスター発表は動画配信によるオンデマンド形式に変更して実施しました．24 件の発表があり，うち 22 件の学生発表の中から学生優秀発表賞 2 名を本学会大会審査基準に準じた評価法により選出しました．優秀賞に選出されたお二人は，岡山大学大学院生の伊藤千晶さん（メトミノストロビンの抵抗性誘導作用に関する研究 9. シロイヌナズナにおける PTI および SAR 関連遺伝子の発現に対する影響）と同じく岡山大学農学部の土田菜月さん（*Rhizobium vitis* VAR03-1 株のブドウ根頭がんしゅ病拮抗能を司るテイロシン rhizoviticin の機能解析）です（写真 1）．お二人ともはっきりとした口調で発表し，ポイントが理解しやすいスライドを準備したこと，そして質疑応答にも明瞭に回答したことが評価されたものと思います．

最終日の閉会の際には，本学会名誉会員である土屋健

写真 1

写真 2

一九州大学名誉教授に総括頂き，画面上での集合写真も撮影させて頂きました（写真 2）．次年度の植物感染生理談話会を東北で開催することを確認し，東北大学の高橋先生を中心とした運営事務局をご準備頂くことになりました．今回，植物病理学会の若手会員のための伝統ある夏の合宿を web 開催により引き継ぐことができました．次年度に従来の対面形式が復活することを期待しまして報告にかえたいと思います．（竹下　稔）

3. 技術士対応委員会

令和 2 年度技術士第二次試験（農業部門・植物保護）で 6 名が合格

令和 2 年度の技術士第二次試験は，令和 3 年 4 月 30 日に合格者が発表されました．農業部門・植物保護では 6 名の方が合格されています．（敬称略・官報掲載順）．

眞岡 哲夫（農研機構植物防疫研究部門；本会会員），加藤 綾奈（東京都農林総合研究センター），小板橋 基夫（農研機構 中日本農業研究センター；本会会員），藤原 聡（日本森林技術協会），内橋 嘉一（兵庫県立農林水産技術総合センター；本会会員），稲田 稔（佐賀県農業試験研究センター）．

今回の合格者を合わせ，技術士第二次試験（農業部門・植物保護）の累計合格者は計 148 名となりました．引き続き，試験研究機関や民間企業，大学など，多様な組織から多くの方の受験をお願いします．令和 4 年度の技術士第一次試験は令和 4 年 11 月 27 日（日）に，技術士第二次試験の筆記試験は，令和 4 年 7 月 18 日（日）に行われる予定です．詳細は日本技術士会のホームページの試験・登録情報から，試験の実施案内を御確認ください．令和 4 年度も多くの技術士（農業部門・植物保護）の誕生を期待しています．

【学会活動予定】

1. 2022 年度大会ならびに研究会・談話会開催予定

（1）日本植物病理学会大会

日時：令和 4 年 3 月 27～29 日

場所：オンライン開催（zoom ウェビナー）

事務局：北海道大学北方生物圏フィールド科学センター

（2）第 16 回バイオコントロール研究会

日時：令和 4 年 3 月 29 日

場所：オンライン開催（zoom）

事務局：農研機構植物防疫研究部門

（3）第 31 回 殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム

日時：令和 4 年 3 月 30 日

場所：オンライン開催（zoom）

事務局：JA 全農 営農・技術センター 農薬研究室

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは，身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております．会員の各種出版物のご紹介，書評，会員の動静，学会運営に対するご意見，会員の関連学会における受賞，プロジェクト研究の紹介などの情報をお寄せ下さい．下記宛先まで，よろしくお願い申し上げます．

投稿宛先：〒 114-0015　東京都北区中里 2-28-10
日本植物防疫協会ビル内
学会ニュース編集委員会
FAX：03-5980-0282
または，下記学会ニュース編集委員へ：
門田育生，宮田伸一，山次康幸，宮本拓也，川部眞登

編集後記

明けましておめでとうございます．新年にあたり，会員の皆様のご健勝と学会の益々の発展をお祈りいたします．

学会ニュース第 97 号をお届けします．寒い日が続きますが，寒さの中にも少しずつ春の気配が感じられるようになってきました．しかし，一昨年から続くコロナウイルス

の蔓延は未だ治まらず，学会活動においても様々な影響が出ています．特に部会・研究会では対面形式での参加を見送り，やむなくオンラインに切り替えての開催となりました．そのような状況ですが，参加者数は例年と同じかそれ以上になったところもあったようです．これは準備を進めて頂いた開催事務局を始め関係者の皆様のご尽力によるものと思います．ありがとうございました．また，東北部会並びに九州部会では講演発表に加え，地域貢献賞の授与，また九州部会では学生優秀発表賞の選出が行われました．受賞された皆様，おめでとうございます．

ところで，令和2年度技術士第二次試験（農業部門・植物保護）で6名が合格され，今回の合格者を合わせ，累計合格者は計148名となったとのことです．試験の詳細は関係のホームページをご覧頂ければと思います．

2022年度大会ならびに研究会などの開催については，ご案内の通りオンラインで行われます．オンラインの運用方法にも様々な工夫がされてきているようですので，多くの方々にご参加いただきますようお願い申し上げます．

（門田育生）